
夢幻学園

ゴマのすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻学園

【Nコード】

N2311B

【作者名】

ゴマのすけ

【あらすじ】

物体の運動を操れる能力【サイコキネシス】を持つ煌暁美が通いだした【夢幻学園】高等部は不思議な学校だった！？コメディーありの学園ファンタジー。

0 時限目 プロローグ（前書き）

さて始めました、【夢幻学園】。更新は不定期ですが応援よろしくお願いします。

0時限目 プロローグ

「っふあゝ」

眠い目をこすりながら彼女は起きた。

彼女の名は、煌きらめき 暁美あけみ。

今日から始まる新たな高校生活に胸を踊らせている。

暁美が通うのは私立の【夢幻学園】高等部。あんまり有名ではないが、この【夢幻学園】は生徒数は少ないが幼稚園から高校まで入っている。

そして、高等部からは全寮制である。つまり、今暁美は寮にいる。

「あ、朝ごはん作らなくちゃ」

暁美はベットから出てはいないが、なぜか調理器具がポスターガイスト現象の様にキッチンでひとりでに動いている。

暁美は超能力者なのだ。能力名は『モーション コントローラー』通称、【サイコキネシス】。物体の運動を操ることができる。

「能力がバレるとまずいのから気を付けなくっちゃな」

そして、暁美は時計を見た。8時10分。入学早々から遅刻する訳にはいかない。

暁美は誰もいない部屋へ向かって

「いってきまーす！」

と言い、暁美は急いで学校へと向かった。

1 時限目 入学式（前書き）

【夢幻学園】の入学式。そこで、暁美は【夢幻学園】の秘密を聞くことになる・・・。

1時限目 入学式

暁美は能力を使い、急いで学校へと向かった。

学校に着くと、暁美は自分のクラスは何組だかを確認しに行った。

暁美は1組であった。

しかし、一学年で女子、男子それぞれ2組ずつしかないということがわかった。

〈少ないなあ〉

夢幻学園では男子と女子ではクラスは別に分けているので合わせても全部で4クラスだ。

「・・・・・・？」

・・・・クラスが書いてある名簿を見てなぜか気になるのは外国人

名がかなりあるということだ。

暁美は、夢幻学園って国際的なんだなあと妙に感心し、自分のクラスへと向かった。

――

教室には多くの生徒が既にいる様だ。

教室の黒板には紙が貼っており、そこに自分の名前と席の位置が書いてあった。

暁美は自分の席に座り、後ろにいる見た目からして少し内気そうな子に話しかけた。

「おはよう。私の名前は煌　暁美。これからヨロシクね☆」

「あっ、あ、あの、・・・わ、わたしはリミナです。こ、これから宜しく願います・・・」

「うん、リミナちゃんだね☆　ヨロシク」

暁美は後ろの、リミナという子をチラリと見て、その後すぐにまたリミナの方を今度は目を見開いて見た。

リミナは俗に言う『美少女』という部類に入る様な子だ。髪はライトブラウンで肩の辺りまで伸ばしてある。そして最も特徴的なのが、その綺麗な瑠璃色の瞳だ。

「あ、あの、どうかしたんですか？」

「・・・あ、いや、なんでもない」

暁美は自分がリミナをボーッと見つめていたことを恥ずかしく思いながら言った。

「そうだ、もう少し時間があるから何か話そうよ」

教室のドアが開き、先生らしき人が出てきた。

「はい、静かに、静かに。私が、君達1—1の新たな担任、水無瀬みなせだ。一年間よろしくな」

教室がまたザワザワと騒ぎ始める。なんせ、水無瀬の容姿がかなり良かったからだ。

「ほら、お前達、静かにしろ。これから入学式があるからこの後全員体育館に集まれよ」

「はーい！」

という和音がクラス中に短く響きわたった。

――

〈・・・長いなあ〉

暁美は今、体育館の中で行われている入学式の校長の話を聞いている。

校長は、お馴染のおじいさん系であり、おっとりとしている。そしてそういう校長の話は長いというのはセオリーだ。

多分この校長も同様に長いのであろうと暁美は思った。暁美はうとうとしながら聞いていたが、話がそろそろ終わりそうなので起きていた。

「――であるから、生徒諸君には満足する高校生活を送って欲しい。

・・・ここで、高校から入学する諸君達に重要なことを言っておきたい」

校長は少し間を空け、言った。

「諸君達は、この高校に来るきっかけとなったものは何だったであろうか。多分、諸君達は本校の説明会で本校に来ることにした生徒が多くと思う。そして、その説明会の知らせは各家庭へと送られた。では、なぜ本校は 諸君 を選んだかだ・・・」

緊張した空気が体育館内を立ち込める。

「・・・それは、本校、夢幻学園は、普通の人間にはない能力を持った、もしくは人外の者の為の教育施設だからだ」

・・・一瞬、体育館内の時が止まったように音が消える。

そして次の瞬間、それはざわめきへと変わった。

「・・・そして特別なのは生徒諸君だけではない。教員も全てだ。勿論、私もだ。因みに私は超能力者であり、能力名は『ココロノメ』。今、諸君達は何を考えているのかわかる」

更にどよめきは大きくなる。

勿論、暁美も驚いている。自分がいつの間に超能力者だとバレていたのかと。そして同時に、妙な安堵感を覚える。

自分と同じ超能力者はこんなにたくさんいる、という仲間意識が芽生えたからだ。

暁美は安堵と興奮が混ざりあった不思議な気持ちになっていた。

と、ここで、ふとした疑問が浮かんた。

先程、校長が『人外の者』と言ったところだ。

へ・・・どうということだろー？

そんなことを考えている内に入学式は終わった。

――

教室でクラスメイト達が話している。

因みに、今暁美は自分の左と左後ろと真後ろの席の生徒と話している。

真後ろはリミナであり、左の生徒は清風^{きよかぜ}、左後ろの生徒はフィルロスという名前らしい。

清風は滑らかな漆黒の髪が腰の辺りまで伸びている。瞳の色は明るい緋色だ。少し色白の様だが元気のいい生徒である。

「―――そんな、そんなときにオレがな―――」

清風は女子しかないこの校舎では一際目立つ一人称を使っていた。

フィルロスは金髪がセミロングであり、顔はかなり綺麗な部類に入るだろう。瞳の色は吸い込まれそうな漆黒であり、その形は猫の様に縦に細長い。その髪と瞳の色とはどこか合わない様に見える。

「――へえ。そうなんだあ。でもね、もしあたしならね――」

段々と会話が弾む様になったところで、ドアが開いた。水無瀬だ。

「・・・さて、皆も聞いたと思うが、本校、夢幻学園は普通の人間が通う学校とは違う。皆、特殊なんだ、普通の人間から見たらな。・・・そこで！早く皆の事を知る為に、ここで一人ずつ自己紹介をしてもらおうと思う。一応でも聞いておいた方がいいぞ」

・・・話が繋がってないところがあるなあと思いつつ、自己紹介が始まった。

1 時限目 入学式（後書き）

出来る限り早めに更新したいとは思っていますが実際はそうはいかないところもあると思います。

2 時限目 自己紹介（前書き）

クラスで自己紹介が始まる。クラスメイト達的能力とは！？また、
人外の者とはどういうことか？

2時限目 自己紹介

「さっきも言ったが、自己紹介は聞いておいた方がいい。じゃあとりあえず俺から始めるぞ」

なぜ聞いておいた方がいいのかはわからなかったが、今はとにかく話を聞いてみようと思美は思った。

「俺の名前は水無瀬 光（みなせ ひかり）だ。8月7日生まれのO型で趣味は寝ることだ。因みに俺は超能力者の方だ。ちよつとこれを見てくれ」

といって水の入ったペットボトルを取り出した。

「これはどこでも売ってるミネラルウォーターなんだが、勿論タネも仕掛けもないぞ。ちよつと音が出るが驚かないようにこれを見ていてくれ」

というと、教卓の上にそれを置き、手をかざした。

すると、少しペットボトルの中身の水が動いたかと思うと、勢いよくふたがはずれ、中身の水が飛び散った。

しかし、飛び散った水は落ちてこなかった。そこには白い水蒸気がたちこめているだけだった。

一瞬の静寂の後、オオーとクラスに歓声が響いた。

「さて、俺の能力は、『ライトブレイク（Light & amp; out break）』つまり、【発光能力】だ。

お前達も知ってるかもしれないが、光というのは波の性質と粒の性質を持っている。

ここでは波について考えてみるぞ。

光は波長によって色々性質が違う。今俺達が見ているのは可視光線であり、これは光の波長全体から見てもとても狭い領域なんだ。可視光線よりも波長が短いものには可視光線に近いものから、紫外線、X線、γ線と続く。波長が長いものには、可視光線に近いものから、赤外線、電波（長波・超長波など）がある。

さて、さっきのことだが、お前達は電子レンジの仕組みを知ってるか？ あれはとでもある波長の短い光を用いて水分子を振動させて熱を発生させるわけだが、さっきもそれを再現しただけだ。要は俺が出した波長の短い波がペットボトルの水を蒸発させてふたを飛び散らせたってわけだ」

へ・・・す、凄いつゝ

暁美は改めて驚いた。自分以外にも、凄い能力を持った人間がいるのだと。そして、暁美は目を輝かせて話に耳を傾けていた。

「んーじゃ、窓際の前からいつてみよう」と水無瀬が言った。

前に出て行った生徒はとても気品のありそうな子だった。少し長めの黒い髪をなびかせ、スタスタと教卓の上へと上がった。

「・・・皆さん、はじめまして。私は神咲^{かみざき}麗華^{れいか}。誕生日は5月6日、A型です。・・・私の祖先は昔、いわゆる『鬼』と呼ばれたものでした。因みにあの姿は勝手に人間が想像で書いたものです。容姿は普通の人間と全くといっていい程変わりません、角が生えていること以外は。能力と言え、超人的な力とスピードと生命力でしょうか」

そういうと、片手で教卓を10センチ程持ち上げた。

再び巻きおこるオオーという歓声。

そして、またスタスタと席へと戻っていった。

暁美は一瞬、訳がわからなくなったが、すぐに理解した。

〈校長の言ってた『人外の者』っていうのはこのことかあゝ〉

暁美はまたもや驚きが隠せなかった。

その後、自己紹介がどんどん進んでいき、色々な能力を持った人や色々な人外の者がいた。

例えば、『ヒート マスター』『温度操作能力』、『トキノイタシシャ』『時間速度操作能力』、『ウォーター ウォーカー』『水操作能力』、『ライジン』『電気発生能力』、『コワレヌカラダ』『身体硬化能力』等、多種多様な能力があった。
人外の者については、『悪魔』、『サラマンダー』等がいた。

彼等は普段は人間の姿をしているがそれは魔法の様なもので取り繕っているらしい。

へもうここまでくるとファンタジーだなあ

・・・暁美の能力も十分ファンタジックであることを忘れていた
美であった。

更に自己紹介は進んでいき、清風の順番が回ってきた。

「・・・オレの名前は紅架こうか 清風きよかぜ。1月4日生まれ。吸血鬼なんでも血液型はありません。一年間宜しくお願いします」
さっさと自己紹介を終わらせ、すぐに席へと戻った。

へ・・・うーん、清風ってやっぱ目立つ口調だよなー、って、吸血鬼だったんかい!？」

暁美は驚いていた。

次はフィルロスだ。

ふと、教卓へ歩いていく足取りをみながら、暁美は
「フィルロスってなんか可愛い系なんだよね。っていうか、うちのクラスはなんでこんなに美人が多いのよー！」
とツツコミながら劣等感に浸っていた。

「あたしはフィルロスと言いまーす。誕生日は11月25日で血液型はO型です。あ、あたしはよくある『ウェアウルフ(werewolf)』俗に言う狼女ってやつですー。皆さん☆一年間宜しくお願いまーす！」

と言い、頭からフワフワとした耳を、顔から長い髭を、腰の後ろから柔らかそうな尻尾を出してみせた。

「へ・・・なんか、世の中のヲタクと呼ばれる部類の人が好きそうな姿だなあ・・・」

それと、さっき『よくある』って言ってたけど絶対によくあるということはないと思うなー」

その後暁美のも終わり、リミナの番となった。

暁美は、リミナはどんな能力なのかわからなかったがリミナは大人しくて少し内気でもあったので多分なんかの超能力者だと思った。

リミナは恥ずかしそうに顔を赤らめて教卓へと上がった。

「・・・わ、わたしの名前は、リミナです！えっと、誕生日は2月8日で、AB型です。・・・えっと、そのー、私はドラゴンです！」

い、一年間、宜しくお願いします！」

そう言うと、リミナの頭と腕が変化し始め、段々と頭と腕が髪と同じライトブラウンに染まっていき、まるでリアルなドラゴンの頭と腕の着ぐるみをリミナが着ているかの様になった。

へうへん、リミナはドラゴンだったのか。一番予想外だったな。へ

やっと長い自己紹介も終わり、暁美はふと気付いた。自分の適応能力の高さに。落ち着いて考えると、まだ高校に入学した初日なのにもうこんなに慣れてしまっている。これも自分の能力なのかなと思ってしまう暁美であった。

2時限目 自己紹介（後書き）

只今、ネタ切れ中です。こんな能力があったらいいな、とか、こんな人外の者もいるよ、等のアイデア募集中！何かアイデアのある人は感想のところに書いてください。もし良いのがあれば作品中に登場します。

3時限目 学生寮にて（前書き）

暁美の『モーション コントローラー』の詳細や学生寮の構造など、少し説明的なところが多いです。

3時限目 学生寮にて

入学式当日は自己紹介の後、軽い連絡をして放課だった。

学生寮の部屋がある棟は、上から見ると中に小さな穴のあいた四角柱状の形をしており、部屋はその四角柱の周りの部分にある。因みに入口は内側にあり、穴の部分の中心には綺麗な噴水のある小さな中庭がある。

その様な形の棟が大食堂や大浴場のある建物を挟んで二つある。一つは女子用、もう一つは男子用だ。

それともう一つ、これは二つの寮と比べるととても小さいが、もう一つ食堂に隣接している小さい建物があるが、これは職員用の寮である。

学生寮は五階あり、一階には食堂、文房具店やその他様々な店等がある。二階は中等部や初等部の部屋と大浴場があり、三〜五階は高等部の部屋となっている。

寮の部屋は一学年で一つの階を使っている。高等部の場合、部屋は卒業するまで三年間変わる事はない。つまり、一年生が使う部屋は前の年の三年生が使っていた部屋、ということになる。

かなり豪華な寮だが、元々お金持ちの行く様な学校ではないので別にお金がそんなにかかる訳ではない。

暁美は放課後、席の近くの四人と共に寮へと帰っていた。

「ねえ、そういえば今日先生が帰り間際に言っていた『明日に向けてじっくり休んどけ』って言ってたのなんですか？」

「うーん、よくわかんないなあ。ただ明日から授業が始まるから言っただけなんじゃないかなあ？」

「いや、オレは違うと思う。何かあるんだよ、明日」

「・・・も、もしかして、テストとかですか？」

「ありえない話じゃないかもね」

それを聞くと四人とも黙りこんでしまった。

その後、暁美が口を開いた。

「ねえ、それともう一つ気になることがあるんだけどさ、先生が『自己紹介はよく聞いとけ』って言ったところが妙に気になるんだよな」

「お、やっぱりそう思ってた？実はオレもさー、それずっと気になってたんだよ。あの担任が連呼するってことは何かありそうな気がするからな」

「・・・ですけど、それが何を意味するんでしょう？」

「やっぱりわからないですう。でも、そんなこと、気にしないのが一番じゃないかなあ？」

その意見に三人は賛成した。そうだ、そんな事は気にしなくていい。何も考えないのときに良い事がある、暁美は自分にそう言い聞かせた。

寮に戻り、夕食を四人で一緒に食べる約束をした後、それぞれの部屋へと戻った。

暁美は自分の部屋へと戻るとのびをして、ベッドへとダイブした。

へふあー

ベッドのモハモハ気持ちいいー！

今日は色々な事があったから疲れたなー

まだ夕食までは時間があるし、ちゃっちゃと明日の学校の用意終わらせて寝よう♪

暁美はベッドに潜りながら能力を使って荷物の整理を始めた。

——暁美は能力を使うのに『精神力』を用いる。

暁美自身は詳しくは知らないが、ほとんどの超能力者はこの『精神力』を用いて能力を発揮する。

『精神力』とは、文字通り心の力である。

その『精神力』は人それぞれ持っている量が違い、またその者の能力の種類、強さによって消費量も変わってくる。精神力は修行したりすることにより増やしたり、消費量を減らすことができる。

また、精神力は体力と違い、睡眠等で回復するのではなく、あくまで睡眠は精神力の回復の補佐的役目を担っている。なぜなら、体が休まっていなければ精神力の回復の速度は遅くなるからだ。精神力を回復させるには心を落ち着け、精神を休ませる必要がある。

例えば、たとえ眠らなくても、温泉、マッサージ、音楽鑑賞でも精神力は回復する。その他、単なる精神統一も多少の回復にはなる。

逆に、たとえ体を休ませても悪夢を見ると精神力の回復が遅くなる。

もし精神力がなくなるとある程度まで精神力が回復するまで気絶してしまう。

暁美の能力『モーション コントローラー』は物体の体積に関わらず質量によって、操る為に必要な力は変わる。

操れる物体は、操ろうとする物体とそれに密接する他の物体は少しでも違う物質、または違う状態でなければならぬ。

例えば、ある金属の塊が一つ、前にあるとすると、その金属の塊を能力で引き千切ることはいできない。

しかし、もしその金属が既に二つに切り離されていたらそれらが密接したとしてもそれぞれの塊を操ることはできる。なぜなら、微少だがその間にはその金属でない、空気がほんの多少なりともあるからだ。また、操る物体の数が多いとき、それら全ての物体を操るにはそのそれぞれの物体の合計の質量を持つ一つ物体を操るよりも更

にエネルギー（精神力）が必要になる。
因みに、今までに暁美はどれ程まで操れるか試したことがあったと
き少しの間だけだが、二十メートル立方くらいの岩石を浮かすこと
ができた。

へふああ・・・

部屋の片付けもついでにやっちゃったけど終わったー

・・・さあ寝ようかな◇

――

「・・・暁美さん遅いですねー」

大食堂。（暁美以外の）三人が集まっている。

「つたく、何してんだか」

「うーん、じゃあ呼びに行かない？」

「でも、本当に部屋に今いるのかわかんないじゃん」

「・・・で、ではどうしましょうか？」

「うーん、でも仕方ないから一回戻って様子を見てこようよ」

そして、三人は暁美の部屋へと向かった。

――

その頃暁美は、

「ムニャ・・・まだまだ食べられるよ・・・ムニャムニャ・・・デ
ザートは・・・別腹・・・だから・・・」

夢を見ていた。

4時限目 衝撃（前書き）

3時限目の続きです。三人に起こされた暁美は食堂で――

4時限目 衝撃

「というわけで、とりあえず暁美ちゃんの所に来た訳だけど、どうするう？」

「中にいるのかどっかに行っているのかわからんなあ。全く、世話のやける奴だぜー」

「中にいるんでしょうか」

「うーん」

三人は考えこんだ。

ガチャ

ドアを開ける音がした。しかし、それは暁美の部屋のドアではない。

三人はその音の方へと振り向いた。

音は近くで鳴っていた。

「あら、どうしたの？・・・あなた達は、・・・うん、リミナさんとフィルロスさんと清風さんね。そんなとこで何してるの？」

彼女の姿を見た途端に、清風の目が光った。

「おー、ちょうどいいところへと来てくれた。ちょっと頼みたいことがあるんだけどさ」

「・・・え？何？」

「実はさ、————」

清風は彼女に何やらゴニョゴニョ話しかけている。

リミナはフィルロスに話しかけている。

「・・・フィルロスさん、思ったんですけど清風さんはわざわざ彼女の耳に手を当ててコソコソ話す必要があるのでしょうか？」

「ないんじゃない？」

———

「・・・ふう、全く、暁美さんは・・・」

そういうと、彼女は暁美の部屋のドアの前に立ち、中を見据えた。

彼女、忍目^{しのめ} 理恵^{りえ}は超能力『サトリノメ』【状況把握能力・透視能力・動向察知能力】の持ち主で、その能力を使えば周りの状況を的確に把握し、見た相手の名前や年齢、性格等の情報を大まかに知ることができる。また、透視能力もある。その能力の中でも彼女の十八番は動向察知能力だ。これは、最大五秒先までの相手の行動がわかるというものだ。

「・・・あゝ、やっぱりぐっすりですね。爆睡して寝言を言っているようです」

「おう、わかった。サンキュー」

「よし、じゃあまずはインターホンでも連打してやるか」

——ピピピピピピピピピピピピピピピピ・・・ピンポーン——

「・・・・・・・・」

「む、無反応・・・」

「・・・ならば手段その2！イタ電しまくる！」

・・・プルルルル、プルルルル、プルルルル、・・・

「・・・うゝん、何？」

「・・・やつと起きたか」

「清風さんって結構子供ですねー」

「そうだねー。大体さあ、インターホン連打してダッシュしないなんて人じゃないよねえ（元々人間じゃないけど）」

「・・・」

――

「・・・あはははは、ごめん。寝ちゃった」

「・・・」

三人の周りには黒いオーラが漂っている。

「・・・すみません・・・」

今、暁美達は食堂にいる。

寮の大食堂はとても広く、そこには軽く500人くらいは入れそうであり、天井はとても高かった。

10人掛けくらいの細長いテーブルがなん十個も食堂に整然と並んでおり、メニューは和食から洋食、中華までなんでも揃っている。

「・・・そうそう、ちょっと三人に聞いておきたいことがあるんだけど」

暁美が三人の食べている様子を見て話しかけた。

三人共『何?』というような顔をした。

「・・・ねえ、あんた達は一応吸血鬼に狼女にドラゴンなんでしょう? 食べる物、なんか普通だね。・・・なんかさ、私の中のイメージと違うからさ・・・」

——因みに清風は洋食を、フィロスは中華を、リミナは和食を食べている。——

そこで三人が口を開いた。

「ま、それは単なるイメージだから。確かに、たまには血が欲しくなるときもあるけどさ、それはホントにごく稀だしそれは我慢すれば大丈夫だからさ、普段はあんま関係ねえんだよ」

「あたしの場合もっと関係ないよー。少なくとも、あたしは普通に人間の食生活でも生きていけるし」

「あ、実は私も清風さんみたいに、たまには生肉も食べたいと思うんですけど、それは我慢すれば乗りきれますから」

「・・・ふん」

暁美にとっては半分驚き、半分納得の答えだった。

「それにしてもさ、賑やかだね、ここはさ」

「そうですねー、ここは唯一と言っていい程の、男女が会える場所です」

暁美は周りを見渡した。ところどころに男子が混ざっている。そして、ちらほらだが、カップルで食事をしているのも見受けられる。

暁美は思い出した。

そうだ、夢幻学園は一応共学だったんだ・・・そして、男子の能力者もいるんだ・・・と。

暁美は食堂内を再び見回した。ふと、ある人物が目に入った。

暁美は時が過ぎるのも忘れて彼をじっと見つめていた。

「暁美ちゃん、彼氏探しでもしているのかい？」

フィルロスのニヤニヤしている言葉に暁美は少し顔を赤らめて我に返った。

そしてすました声で言った。

「ははは、そんな訳ないじゃない。ただボーっとしてただけだよ」

「ホント？」

「ホントだってば」

その後、四人は一緒に風呂に入った。

寮では各部屋に風呂は一応付いているのだが、その他に大浴場がある。

大浴場はちょうど大食堂の上の階に位置する。

あの巨大な食堂の上の階全面を使っているので、この浴場もまた巨大である。浴槽の種類は一年中入っていても飽きない程いくつもあ

り、広々とした風呂はまるでプールの様でもある。サウナや露天風呂も存在し一流の旅館も敵わない程の浴場である。その凄さは、毎日入ってもそれに慣れることはできないくらいだ。

「やっぱり、いつ入っても凄いよな」

「最初なんか、あまりの大きさに圧倒されました」

「女子と男子それぞれが下の食堂の広さの半分が使える訳ですから、更衣室を抜いても十分にスペースはとれるんですよね」

「・・・」

暁美は風呂に入ったときもあまり他の事を考えられずにいた。風呂から出て部屋へと戻った後もそれは変わらなかった。

暁美はただ一つの事しか考えられずにいた。

「あの人は誰だったんだろう・・・」と。

4時限目 衝撃（後書き）

妙な伏線を作ってしまったが、これを使う時が来るのかは不明です。——————引き続き、超能力者・人外の者のアイデア募集中。

5時限目 とんでもバトル!? その1 (前書き)

今回から「バトル編」が始まります。科学的なところは少し間違っているかも・・・(汗) ————— 超能力者・人外の者の戦いが今、始まる。(どーん)

5時限目 とんでもバトル!? その1

目覚まし時計を止め、眠い目をこすりながら暁美は起床した。

辺りを見回す。

〈はぁ、夢か・・・〉

暁美は夢と現実のギャップに溜め息をつき、能力を使い、朝食を準備しようとした。

しかし、冷蔵庫の中にはほとんど何も入ってないのがわかった、再び溜め息をつき、重たそうに体を起こし着替え始めた。

何も食べずに部屋を出たのでお腹が鳴らないように注意しながら暁美は一階の食堂へと向かった。

食堂では朝食も一応売ってはいるがそこで食べる人は少ない。弁当も売っているのでそれを買っていくという人は多い様だ。

一階で暁美はリミナと会った。

「あ、暁美さん、おはようございます」

「おはよう」

「どこに行くんですか」

「いやー、今日冷蔵庫に何も入ってなかったんでさ、食堂で朝ごはんでも食べようかなと」

「へえ。じゃあ私も昼のお弁当を買いに行きます」

「え？・・・うん、いいよ」

できれば暁美はその時誰かと一緒にいたくはなかった。なんせ・・・

・・・グウウウ

リミナはクスツと笑い、

「暁美さん、お腹の虫が演奏会を開いてますよ？」

――

・・・はっ！

暁美はボーッとしていた。いまだに今担任の言ったことがよくわからなくて今日一日の朝からのできごとを思い出していた。

暁美の中で先程水無瀬が言ったことが繰り返し流れていた。

「お前達、今日から二日間実践授業だ。実践って言ったって別に殺し合いをしろって言ってんじゃない。単に、相手と一対一で戦うだけだ、勿論、自分の力を使って構わない。昨日自己紹介で相手の力は十分わかっただろう？これは自分の力と、相手の力を理解し戦う頭脳戦的などころもあるからな。因みにこれは総当たり戦で、勝利数の多い順に順位がつくぞ。あとそうだ、総当たり戦だからって怪我を負う心配をしなくてもいいぞ。保健室の先生がすぐに直してくれるからな」

暁美の頭にはその言葉がかけまわった。

「・・・はい？戦い？総当たり戦？力を使って構わない？って、え
——！？」

へとりあえず落ち着いて考えよう。

要は、クラスメイト同士で戦うと？今日から明日二日間使って？

「・・・よし、それじゃあお前達早速だが、体育館の裏手に大きな建物があっただろう？そこに集まれよー」

へもう？（汗）

暁美は周りの皆の様子を見る。ほとんどの生徒が暁美同様に困惑しているようだ。それはそうだろう、彼女達は自分の力を使って戦ったことなどないのだから。

暁美は皆と一緒に体育館の裏手にある建物へ行った。

その建物は建物というよりも大きなドームと言った方が的を得ている。天井部分はどうやら可動するようで、今は開いている。内部は中心に大きく開けたフィールドがあり、その周り360度に観客席がある。それはまるでコロッセオの様だ。フィールドの地面は土であり、岩等の障害物の様な物も所々に配置してある。

暁美はその大きさに圧倒された。

暁美達のクラス以外の人もいたので、他のクラスも一緒にやるのか、と暁美は思った。

後からやってきた水無瀬が口を開く。

「さて、これから戦いが始まる訳だが、一応ルールと注意事項を言

っておこう」

水無瀬は持っていた紙を読み始めた。

「制限時間は一試合ごとに5分。力を使ってよい。一対一の勝負で、決着はタイムアップ、どちらかがギブアップ、気絶、もしくは相手を30秒間動けない状態にしたら終わり。タイムアップの場合は教員の判定で決める。注意事項は、フィールドの外の観客席には出ない。但し、上空は許される。審判がやめ、と言ったら直ちに試合を中断する。相手の命を奪いかねない強い攻撃はしない。以上」

暁美達は進行表を受け取った。そこには順番と相手を書いてあった。

そして、試合は始まった。

――

さすが超能力者や人外の者の戦いなので、物凄い攻防が続くのであろうと暁美は思った。

第一試合

『ウォーター』

ウオーカー』

【水操作能力】

「水橋流」

V S 『ライジン』

【電気発生能力】

「雷金光」

では、水と電気がフィールド上を舞った。

流の方は、大気中や地面中の水分を集め、それを球体状の盾に、またそれに使っていない水を細長く伸ばして鞭の様に相手に叩きつけたり相手を水の檻に入れようとする。

対して、金光の方は地面に電気を這わせたり、相手の真上から小さな雷を落とす。また、自分の周りに電気を集め、磁場を生成、また周囲の空気は電気の為高温になりプラズマ状態になる。このプラズマ状態になった空気ごと相手に突っ込んで行ったりする。

両者とも激しい猛攻が続く。水分が金光の方に近付いてもその温度の為にすぐさま蒸発、フィールドは蒸気で覆いつくされる。

この時、大きな爆発音が聞こえた。次の瞬間、バシヤツとした音が聞こえた。

蒸気が段々と晴れてくると、流の方が倒れていた。

流の近くに保健室の教員であろう人が走っていき、ポワツとした光と音がしたと思うと、倒れていた流は目を開け、何ごともしなかったように立ち上がった。

蒸気で見えなかったところで何が起こったのかというと、蒸気が覆った後、水の盾に当たった電気の為、水が電気分解をして水素と酸素に分解、そこにプラズマ状態の金光が突っ込んでいき、発火、爆発する。それにより水の盾が消えたところで金光が流に電気を当てた、ということらしい。

暁美は今の壮絶な試合にみとれていた。

次は暁美の番であるということ忘れて。

5時限目 とんでもバトル!? その1 (後書き)

どうでしたか?こんな感じで何話かはやっていききたいと思っています。
す。

6時限目 とんでもバトル!? その2 (前書き)

暁美 VS 清風 —— なんかすごい勝負になってます。果たしてどちらが勝つか・・・

6時限目 とんでもバトル!? その2

暁美は第一試合を見てて自分が次の試合だということを忘れていた。

「おい、次は俺達だろ。早く行こうぜ」

清風が暁美にそう言うと、暁美は一瞬顔にクエスチョンマークをうかべ、少しの間時が止まる。そして、暁美は

「あ———!」

と大声を出し、顔が少し青くなった。

――

暁美は下のフィールドへと降りていった。反対側からは清風が出てきた。

フィールドは風が吹き、少し寒い。しかし、皆からの視線を浴び、暁美は少し顔を赤らめ、絶対に負ける訳にはいかない、とやる気が出た。

清風の方を向くと、暁美は背中に何か冷たいものが流れる様な気がした。

普段の子供っぽく、少し抜けているところもある清風が今は体の周りに黒いオーラが見えてきそうである。目は普段より更に紅くなり、血走っている。薄いピンク色の唇からはこれまで見たことのない

い、白くとがった牙が全部で4本見える。また、手の爪は長く鋭いくなっている。いつの間にか体操服から黒いローブに着替えてあり、その姿からでも威圧感がある。

第二試合

『モーション コントローラー』 【サイコキネシス】

「煌 暁美」

VS

『深紅の牙』 【吸血鬼】

「紅架 清風」

暁美はまず様子を見るために相手から離れて岩陰に隠れた。一応能力を使って近くの岩を集め、盾の様なものを作った。そして、余った岩を清風の方に投げる。

清風はそれらをひよいと軽々よけ、地面を強く蹴る。すると清風の体は軽々10メートル程まで上昇し、暁美の方へ手をかざす。すると、清風の手から暁美の方に黒いレーザーの様なものが飛んでいく。それは予想以上に強く、暁美の盾を段々と崩していく。その薄くなった盾の部分に清風は突っ込んでいき、長く伸びた鋭い爪で盾を崩す。

暁美はそれに気付き、ガードを更に堅くしながら後退した。

そして、前に作った盾が崩されると、暁美は今度は近くの土を集め、それを清風の方へと飛ばし、それをフィールドの中をグルグル回るように動かした。暁美自身も浮き、上の方から今は砂嵐の様になっているフィールドを見る。下はもはや何も見えなくなっている。そこに、たまに清風の発する声が聞こえる。

清風は時々大きな石が当たって体に傷がついていくのを感じながら
辺りが何も見えない砂嵐の中で色々と思いを巡らしていた。暁美は
この砂嵐の中にいるのか？しかし、あちらもこっちの姿は見えない。
では、どこにいるのか。・・・答えは一つ！

暁美は砂嵐をじっと見つめていると、その中から何かが出てきた。
非常に速いのでそれが何だかわからなかった・・・次の瞬間、暁美
は頭に強い痛みを感じた。どうやら清風が暁美の後頭部を殴ったよ
うだ。砂嵐が消え、そこに暁美はうつろになった意識で落下してい
るのを感じた。

暁美は次に気が付いた時、目の前に大空が広がっているのを感じた。

「負けたのか・・・」

と暁美が言うと、近くにいた保健室の先生であろう人が、

「いや、勝ったよ。おめでとう」

「はい・・・？」

暁美は目を見開いた。自分が何をしたのか？勝った？確か、自分は
落下して気絶したのではないのか？

「あら、もしかして覚えてないの？」

保健室の先生がそう言うと、あの子の話を話してくれた。

――
――
暁美が落ちると、清風も降りてきた。そして、倒れている暁美が本当に気絶しているのかを確認する為に暁美の様子を見ようとした――瞬間、清風の体が宙に浮かんた。清風は何がなんだかわからずに暴れようとしたが、ビクとも動けない。

無表情の暁美はスッと立ち上がり、目の前に浮いている清風の方へ手を向けた。すると、清風は一切の抵抗ができないまま壁に叩きつけられた。無表情のまま、暁美は清風を壁に押し付ける。清風の口からは鮮やかな紅い血が噴き出したが、清風は口元では笑っていた。

「・・・くっ、やられた。完敗だぜ・・・」

そう言うと、清風は気絶した。

審判が判定を告げた後、暁美も倒れた。

――
――
なぜ暁美が落ちたとき気絶しなかったのかと言うと、地面に落ちる直前、力を振り絞ってどうにか地面すれすれで自身を止めたらしい。

――
――
暁美はその話を聞くと、とても困惑した様な表情をした。自分がそんな事をした記憶は全くなかったからだ。

しかし、現実には清風のいる近くの壁はひびが入り、何かがあるところにめり込んでいた痕跡があるところを見ると、これを否定するのは難しいと曉美は悟った。

――

ようやく気を落ち着けて立ち上がると前に清風がいた。

「ふふふ、勝ったと思ったんだがな、・・・やられたよ。お前の場合、近付くのはできる限り避けた方が良かったのにな・・・」

そう言うと、清風は倒れている曉美に手を差し出してきた。曉美はその手を取り、立ち上がった。そして、改めて握手した。

その時曉美は何か一つ違和感を感じた。
へさつき清風さんが手を差し出してくれたけど、普通逆・・・の様な気がする・・・と思う曉美であった。

6時限目 とんでもバトル!? その2 (後書き)

バトルだと簡単に書ける!、ということに気付きました。もしかしたらこの「クラスバトル編」は何話も続くかも!? ――――引き続きアイデア募集中。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2311b/>

夢幻学園

2010年11月7日07時56分発行